

# 平成 26 年度 事業報告書

# 目 次

## I. 法人の概要

1. 学校法人の沿革
2. 設置校・学部・学科等組織
3. 学園事務局組織
4. 各設置校の入学者数・在籍者数の状況
5. 各設置校の卒業生数
6. 各設置校の教職員数
7. 役員・評議員の概要

## II. 主な事業の概要

1. 学園財務の概況
2. 各設置校の事業
  - 大学院・大学・短期大学部
    - (1) 学生の募集に関わる活動
    - (2) 各学部学科の教育の質の向上及び研究に関わる活動
      - ① 教育内容及びカリキュラムの改革
      - ② 教育の質の向上への取組み（FD）
      - ③ キャリア教育の推進（キャリアセンター）
      - ④ 生涯学習の支援（地域連携推進センター）
      - ⑤ 国際交流事業
      - ⑥ 研究活動支援
    - (3) 学生の支援に関わる活動
      - ① エンロールメント・マネジメント（EM）の取組み
      - ② 学習ステーション・commons等学びの環境整備
      - ③ 就職支援

- ④ 課外活動
- ⑤ 多様な学生ニーズへの対応
- ⑥ 地域との共生・連携
- ⑦ 管理運営の強化

#### ■ 高等学校・中学校

- (1) 生徒の募集に関わる活動
- (2) 教育の質の向上に関わる活動
- (3) 教員の指導力向上に関わる活動
- (4) 進路指導（進学支援）の強化
- (5) 課外活動
- (6) 生徒へのきめ細やかな指導
- (7) 地域との共生・連携

#### ■ 小学校

- (1) 児童の募集に関わる活動
- (2) 教育の質の向上に関わる活動
- (3) 教員の指導力向上に関わる活動
- (4) 進路指導（進学支援）の強化
- (5) 課外活動
- (6) 児童へのきめ細やかな指導
- (7) 地域との共生・連携

#### ■ 幼稚園

- (1) 園児の募集に関わる活動
- (2) 満3歳児保育の試行
- (3) 特色教育
- (4) 課外活動
- (5) 園児・保護者へのきめ細やかな対応
- (6) 子育て支援の強化
- (7) 地域との共生・連携
- (8) 幼稚園創立50周年事業
- (9) 建学の精神と伝統文化教育の探求

### 3. 付属施設の事業

---

- 真宗文化研究所
- 図書館
- 情報教育センター
- カウンセリングセンター
- 人権啓発センター

### 4. 学園力強化に向けた事業

---

- (1) 学園広報活動
- (2) 教員評価制度
- (3) 職員力（SD）・組織力の向上
- (4) コンプライアンスの強化 ～規律・規範の徹底 内部統制の強化～

### 5. 独自の取組み

---

- (1) 幼小中高一貫教育の創造
- (2) 建学の精神と伝統文化教育の探求
- (3) 奨学金制度
- (4) 陸上競技部の活動

## Ⅲ. 施設・設備計画等の整備事業



## 1. 法人の概要

### 1. 学校法人の沿革

昭和 15 年 4 月 1 日	光華高等女学校 開設
昭和 19 年 3 月 11 日	光華女子専門学校 開設 数学科、生物科、保健科を設置
昭和 22 年 4 月 1 日	光華中学校 開設 (学制改革により光華高女より移行)
昭和 23 年 4 月 1 日	光華高等学校 開設 (学制改革により光華高女より移行)
昭和 25 年 4 月 1 日	光華女子短期大学 開設 (文科・家政科設置、光華女子専門学校より移行)
昭和 26 年 2 月 28 日	学校法人 光華女子学園設立認可
昭和 29 年 4 月 17 日	光華衣服専門学院 開設
昭和 39 年 4 月 1 日	光華女子大学 開設 日本文学科・英米文学科を設置 (短大文科を移行)
昭和 40 年 4 月 1 日	光華幼稚園 開設
昭和 43 年 4 月 1 日	光華小学校 開設
平成 3 年 4 月 1 日	真宗文化研究所 開設、情報教育センター 開設
平成 6 年 4 月 1 日	大学 文学部に人間関係学科を開設
平成 6 年 11 月 22 日	光華衣服専門学院 廃校
平成 10 年 4 月 1 日	光華女子大学 大学院 文学研究科 (修士課程) を開設 (日本語日本文学専攻、英語英米文学専攻を設置)
平成 12 年 4 月 1 日	光華女子短期大学、生活学科を光華女子大学短期大学部 生活環境学科に改称 大学 日本文学科を日本語日本文学科に改称、 英米文学科を英語英米文学科に改称
平成 13 年 4 月 1 日	光華女子大学、光華女子大学短期大学部、光華高等学校、 光華中学校を京都光華女子大学、京都光華女子大学短期大学部、 京都光華高等学校、京都光華中学校へ校名変更 京都光華女子大学 文学部 人間関係学科を改組し、 人間関係学部 人間関係学科を設置
平成 14 年 4 月 1 日	短期大学部 栄養専攻・食生活専攻を改組し、 大学 人間関係学部 人間健康学科を設置
平成 15 年 4 月 1 日	大学 人間関係学部 社会福祉学科を設置
平成 16 年 4 月 1 日	大学院 人間関係学研究科 (修士課程) を開設 京都光華女子大学カウンセリングセンター (人間関係学研究科附属施設) 開設
平成 17 年 4 月 1 日	京都光華女子大学エクステンションセンターを開設

- 平成 18 年 4 月 1 日 短期大学部 生活環境学科をライフデザイン学科に改組  
ライフデザイン学科（「地域総合科学科」適格認定）  
短期大学部 こども保育学科を設置
- 平成 20 年 4 月 1 日 大学 人間関係学部を人間科学部に改称  
大学 英語英米文学科を国際英語学科に改称  
大学 人間健康学科を健康栄養学科に改称
- 平成 22 年 4 月 1 日 大学 文学部、人間科学部を改組、人文学部、キャリア形成学部、  
健康科学部を設置  
大学 人文学部に文学科、心理学科を設置  
大学 キャリア形成学部キャリア形成学科を設置  
大学 健康科学部に健康栄養学科を設置
- 平成 23 年 4 月 1 日 大学 健康科学部に看護学科を設置
- 平成 25 年 4 月 1 日 大学 健康科学部健康栄養学科に健康スポーツ栄養専攻を設置  
(管理栄養士専攻、健康スポーツ栄養専攻の2専攻体制)  
京都光華女子大学地域連携推進センターを開設
- 平成 26 年 4 月 1 日 大学院 人間関係学研究科を心理学研究科に改称  
大学 人文学部文学科を募集停止  
大学 人文学部心理学科を改組、健康科学部に心理学科を設置、  
大学 健康科学部に医療福祉学科を設置  
(社会福祉専攻、言語聴覚専攻の2専攻体制)

## 2. 設置校・学部・学科等組織

設置校・学部・学科等組織図

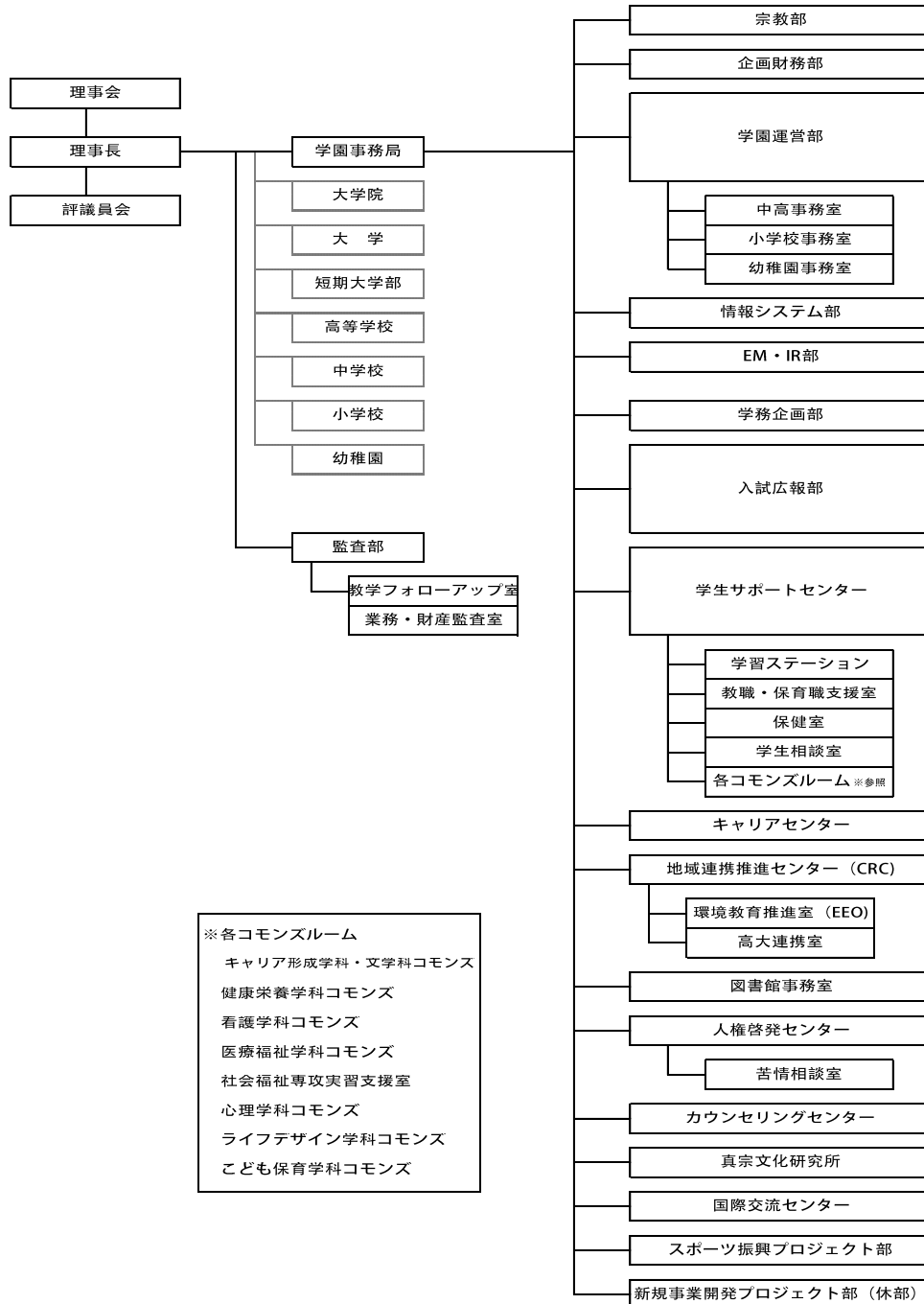
■光華女子学園

平成26年5月1日現在

京都光華女子大学大学院 【修士課程・女子のみ】	心理学研究科 ※平成26年4月1日より人間関係学研究科 から心理学研究科へ名称変更	○臨床心理学専攻
京都光華女子大学 【女子のみ】	人文学部 (2年生～4年生)	○文学科 日本語日本文学専攻 国際英語専攻 ○心理学科
	キャリア形成学部 (1年生～4年生)	○キャリア形成学科
	健康科学部 (1年生～4年生) (1年生～2年生) (1年生～4年生) (1年生のみ)  (1年生のみ) (1年生のみ)	○健康栄養学科 管理栄養士専攻 健康スポーツ栄養専攻 ○看護学科 ○心理学科 ○医療福祉学科 社会福祉専攻 言語聴覚専攻
	文学部(4年生のみ)	○日本語日本文学科
	人間科学部(4年生のみ)	○人間関係学科 臨床心理専攻 心理学専攻 メディア情報専攻 ○健康栄養学科
京都光華女子大学短期大学部 【女子のみ】	ライフデザイン学科	
	こども保育学科	
京都光華高等学校 【女子のみ】	全日制課程普通科	○特別進学スーパープリムラコース ○特別進学プリムラ関大コース ○総合進学ライラックコース
京都光華中学校 【女子のみ】		○スーパープリムラコース ○プリムラ・ライラックコース
光華小学校 【男女共学】		
光華幼稚園 【男女共学】		

### 3. 学園事務局組織

平成26年5月1日



#### 4. 各設置校の入学者数・在籍者数の状況

##### 【大学院(修士課程)】

単位:人 平成26年5月1日現在

研究科	入学定員	入学者数	収容定員	現員数
心理学研究科	10	3	10	3
人間関係学研究科			10	8
計	10	3	20	11

※平成26年4月1日より人間関係学研究科を心理学研究科に名称変更

##### 【大学】

単位:人 平成26年5月1日現在

学部	学科	入学定員	入学者数	収容定員	現員数	学年
文学部	日本語日本文学科				2	4年生
人間科学部	人間関係学科				2	
	健康栄養学科				1	
人文学部	文学科			318	97	2～4年生
	心理学科			360	178	
キャリア形成学部	キャリア形成学科	80	66	440	259	1～4年生
健康科学部	健康栄養学科	120	147	400	443	
	看護学科	80	98	340	391	
	心理学科	80	37	80	37	
	医療福祉学科	80	65	80	65	1年生
計		440	413	2,018	1,475	

##### 【短期大学部】

単位:人 平成26年5月1日現在

学科	入学定員	入学者数	収容定員	現員数
ライフデザイン学科	150	88	300	205
こども保育学科	80	67	160	137

##### 【高等学校～幼稚園】

単位:人 平成26年5月1日現在

	入学定員	入学者数	収容定員	現員数
高等学校	260	210	780	523
中学校	100	48	300	146
小学校	60	39	360	349
幼稚園	70	84	280	275

## 5. 各設置校の卒業者数

【大学院(修士課程)】 単位:人 平成27年3月末卒業

学科	卒業者
人間関係学研究科	6
計	6

【大学】

学部	学科	卒業者
文学部	日本語日本文学科	1
人間関係学部	人間関係学科	1
	健康栄養学科	1
人文学部	文学科	46
	心理学科	66
キャリア形成学部	キャリア形成学科	73
健康科学部	健康栄養学科	86
	看護学科	76
	計	350

【短期大学部】

学科	卒業者
ライフデザイン学科	113
こども保育学科	68
計	181

【高等学校～幼稚園】

校園	卒業者
高等学校	142
中学校	52
小学校	70
幼稚園	86
高～幼 計	350

学園合計	887
------	-----

## 6. 各設置校の教職員数

### 【教員】

単位:人 平成26年5月1日現在

		専任教員
大学	キャリア形成学部	21
	健康科学部	65
	大学計	86
短期大学部	ライフデザイン学科	12
	こども保育学科	9
	短期大学部計	21
高等学校		39
中学校		12
小学校		20
幼稚園		14
計		192

### 【職員】

単位:人 平成26年5月1日現在

	専任職員
大学	59
短期大学部	16
高等学校	8
中学校	3
小学校	1
幼稚園	1
学校法人	5
計	93

## 7. 役員・評議員の概要

### 光華女子学園 役員評議員一覧

(平成26年6月1日現在)

役職名	氏名	常勤・非常勤
理事長	阿部敏行	常勤
理事	阿部敏行	常勤
”	一郷正道	常勤
”	高木英明	非常勤
”	由良徹	常勤
”	阿部恵木	常勤
”	田中セツ子	非常勤
”	中村晃	非常勤
”	左藤孜	非常勤
”	左藤一義	非常勤
”	齊藤修	非常勤
”	(以上10名)	
監事	池内常郎	非常勤
”	佐藤義彦	非常勤
”	(以上2名)	
評議員	長者美里	常勤
”	岡田邦男	常勤
”	森圭子	常勤
”	相場浩和	常勤
”	下村弘幸	常勤
”	朝比奈英夫	常勤
”	吉川秀樹	常勤
”	田中セツ子	非常勤
”	小谷真由美	非常勤
”	渥美裕子	非常勤
”	石田育代	非常勤
”	阿部敏行	(理事)
”	高木英明	(理事)
”	一郷正道	(理事)
”	由良徹	(理事)
”	阿部恵木	(理事)
”	西村義行	非常勤
”	左藤章	非常勤
”	中村祐	非常勤
”	二宮周平	非常勤
”	木越涉	非常勤
”	(以上21名)	



## II. 主な事業の概要

### 1. 学園財務の概況

平成 26 年度の消費収支計算書では、帰属収入 4,276 百万円、消費支出 4,560 百万円となり、帰属収支差額は▲284 百万円で、昨年度より赤字が拡大した。

消費収入の部において、学生生徒納付金は増加したものの、国債等の安定運用により資産運用収入が減少し、退職者減に伴う退職金財団交付金減により雑収入が減少するなど、消費収入は昨年比▲52 百万円となった。消費支出の部において、新設学部開設に伴う教員採用増と教材経費等の増により、人件費と教育研究経費等が増加した。基本金組入は 454 百万円で、耐震・バリアフリー化・新設学科の備品購入等に投資した。

#### 平成 26 年度消費収支計算書

(単位：百万円)

科 目		H26年度 決算 (A)	H25年度 決算 (B)	差 (A) - (B)
消費 収入 の 部	学生生徒等納付金	3138	3068	70
	手数料	51	62	▲ 11
	寄付金	25	32	▲ 7
	補助金	826	833	▲ 7
	資産運用収入	60	106	▲ 46
	資産売却差額	27	11	16
	事業収入	52	50	2
	雑収入	97	133	▲ 36
	帰属収入合計	4276	4295	▲ 19
	△基本金組入額合計	454	421	33
消費収入の部合計	3822	3874	▲ 52	
消費 支出 の 部	人件費	2786	2704	82
	教育研究経費	1413	1352	61
	管理経費	342	318	24
	借入金等利息	13	14	▲ 1
	資産処分差額	2	7	▲ 5
	徴収不能引当金繰入額等	4	4	0
	消費支出の部合計	4560	4399	161
帰属収支差額	▲ 284	▲ 104	▲ 180	
帰属収支差額比率 (%)	▲ 6.6	▲ 2.4	▲ 4.2	
人件費比率 (%)	65.2	63.0	2.2	

## 2. 各設置校の事業

### ■ 大学院・大学・短期大学部

#### (1) 学生の募集に関わる活動

- ◆ オープンキャンパスを年間9回（3月～12月）開催し、学部・学科の教育内容の説明、さらにそれを直接体験するアクティブラーニング型のミニ講義を実施した。告知については、オープンキャンパスリーフレットを配布するとともに、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス<sup>※</sup>）を通じて、日程やイベント内容、実施後の様子をタイムリーで紹介した。8月には、「認知症・摂食嚥下障害に対するチーム医療～超高齢社会における専門職連携の重要性～」と題して、健康科学部専門職連携教育シンポジウムを実施した。

※ ソーシャル・ネットワーキング・サービス…インターネット上の交流を通して社会的ネットワーク（ソーシャル・ネットワーク）を構築するサービスのこと。

- ◆ 高校教員対象の大学説明会を、6月に2会場（京都会場・大阪会場）で開催した。平成27年度新設のこども教育学科をはじめ、各学科の教育内容、就職状況、入試制度等の説明を行った。
- ◆ 近畿地方を中心とした高校への訪問を、年間6回の時期に分けて実施した。うち2回は、北陸・甲信越・東海地方～中国地方のエリアにおいて訪問活動を実施した。
- ◆ 高校向けに71テーマの講義を設定し、要請のあった高校で出張講義を実施した。（47回実施）
- ◆ 学外試験場として平成26年度は大阪会場を新たに追加し、本学以外の5ヶ所で入学試験を実施した。（公募制推薦入試：滋賀[草津]・名古屋・金沢・岡山、一般入試：東京・金沢・名古屋・岡山・福岡）
- ◆ 全国各地で開催される進学相談会や高校内のガイダンスに積極的に参加した。（会場型：80会場、資料参加：84会場、校内：66校）
- ◆ 新学科情報や入試情報、学生活動の状況など、本学ホームページにタイムリーに掲載した。また、リスティング広告<sup>※1</sup>やリマーケティング広告<sup>※2</sup>も実施した。

※1 インターネットの検索エンジンなどの検索結果ページに、検索語に関連した本学の情報を掲載する広告。

※2 本学HPにアクセスした者が契約する別サイトに訪問した時に、本学の情報を掲載する広告。

#### (2) 各学部学科の教育の質の向上及び研究に関わる活動

##### ① 教育内容及びカリキュラムの改革

##### 「大学院心理学研究科」

専門的職業人としての臨床心理士の養成（臨床心理学専攻）を重点課題として、平成26年4月に人間関係学研究科（平成16年度設置）から心理学研究科へ名称変更を行っ

た。附属臨床施設のカウンセリングセンターとともに運営体制を整え、充実した教育研究を図った。

今年度の臨床心理士資格認定試験では、受験者 11 名中 7 名（うち現役生は 7 名中 5 名）が合格した。

その他、地域子育て支援の一環としての「親子教室」、春と秋の「無料相談会」、学外講師を招聘して臨床経験を深める「心理臨床一泊研修会」、教員と院生の研究および臨床活動を報告する「カウンセリングセンター研究紀要」の刊行、宮城県石巻市への震災ボランティアの派遣（年 2 回）等を実施し、専門性を養うための多様な学びの環境を整備した。

### 「人文学部」

人文学部文学科は平成 26 年度から学生募集を停止することとなったが、在学生に対しては入学時に約束した質の高い教育を提供しつづけるよう努めている。その一環として、後期より日本語日本文学専攻の専任教員 2 名を補充した。

教育面では、アクティブ・ラーニング\*としてグループ学習や学外見学・実習を取り入れるとともに、社会人基礎力、専門教育の両面で基礎的学力・能力の向上を図った。カリキュラムを特色づける取り組みとしては、文学科・日本語日本文学専攻の伝統文化教育、国際英語専攻の資格取得支援（TOEIC 自主講座、得点力アップ講演会、英語アドバイス制度）を挙げることができる。

日本語日本文学専攻では秋季遠足や所蔵古文書・古典籍の展示会を開催して学科としての一体感を醸成するとともに、学科活動を学内外に PR した。

卒業後の進路支援については、キャリアセンターと連携して学年毎に年複数回のキャリア講座を開催した。就職率は対卒業生比 65.2%、対希望者比 96.8%であった。

\* アクティブ・ラーニング…教員が一方的に講義を行うという授業スタイルではなく、学生の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法

### 「キャリア形成学部」

7 月に地域貢献として、「地域の環境問題」のテーマで公開講座を開催し、本学部教員が題目「地球温暖化が引き起こす地域の環境問題」で講演した。また、9 月に PBL \*型授業の一環として、平成 25 年度に引き続き、社会福祉法人明星福祉会との共催による「TAKATSUKI COLLECTION ～精神障がい啓発ファッションショー～」を実施した。今年度も盛況で、平成 27 年度も第 3 回として実施予定である。11 月より「キャリア形成学部魅力アップアクションプラン WG」が編成され、教職協働で 7 回の会議を経て、カリキュラムや授業内容等の改善、就職満足度の向上、学生確保等について議論を重ね、平成 27 年度実施に向けたアクションプランを策定した。

- ※ PBL (project-based learning) …課題解決型学習。自ら設定した課題、または与えられた課題を解決していく過程で様々な能力を育成する学習方法

## 「健康科学部」

### 看護学科

#### 1. カリキュラム改正について

本学科は平成 23 年の開設後、看護師、保健師、助産師教育を進めてきたが、完成年度を迎えるに当たり、4 年間の看護基礎教育を評価し、教育課程をさらに高めるべく教育課程（カリキュラム）の見直しに取り組んだ。

#### 2. 大学院看護学研究科の設置

平成 27 年 4 月より大学院看護学研究科看護学専攻（修士課程）を開設すべく、平成 26 年 5 月に文部科学省に認可申請を行い、11 月に無事認可を受けることができた。入学定員は、1 学年 5 名（収容定員 10 名）。臨床療養看護学分野と地域療養看護学分野の 2 分野を研究分野とし、実践科学である看護学のさらなる発展に寄与できる人材の育成を目指す。

#### 3. 国家試験結果と受験対策

本学科の一期生が看護師・保健師・助産師国家試験を受験し、看護師は 77 名中 76 名が合格（98.7%）、保健師は 31 名全員合格、助産師は 7 名全員合格という素晴らしい結果を残すことができた。受験対策の取り組みは、国試対策強化クラスを開講し全員合格を目指し取り組んだ。具体的には、東京アカデミーによる模擬試験や補強講座、教員による個別指導や学習指導対策を基本とし、さらに学生に学習計画表を提出させ、個別指導、模擬テストを実施し、個別弱点の強化に努めた。また、必須問題対策も夏休み期間中に集中的に取り組んだ。

学習支援は、4 回生のクラスアドバイザーと国家試験対策委員の教員が中心に取り組んだが、さらにきめ細かな支援を行うべく国家試験対策担当者を新たに採用し、学科コモンズに配置し、常時対応できる体制を整えた。

### 健康栄養学科

健康栄養学科では、再試験制度を利用したより厳格な成績評価を行うことにより、学生の学習意欲の向上を図った。管理栄養士専攻では、カリキュラムの改善を昨年度以降実施しており、専門科目の学年配当を順次下げることにより、1・2 年次より管理栄養士資格取得へのモチベーションを高めることができるようにしている。勉学への動機付けとして、管理栄養士専攻・健康スポーツ栄養専攻 1 年生に対する基礎ゼミ、管理栄養士専攻での 2・3 年生研修、健康スポーツ栄養専攻での講演会の実施

により、専門職意識を醸成するキャリア教育を実施した。管理栄養士国家試験対策としては、昨年度、国家試験対策の改善を行ったこともあり、国家試験合格率 94.6% を達成できたが、それに甘んじることなく、さらなる改善に向け、4年間を通じた一貫した国家試験対策の充実およびきめ細かい個人指導を実施した結果、今年度は、昨年度をさらに上回る 97.3% を達成できた。具体的には、1年次から4年次までの段階を追った課題の提供、2・3年次の課題提出後のテストの実施、4年次の国家試験対策授業回数・模擬試験回数の増加、東京アカデミーの秋季集中講座・春季直前対策講座の充実、習熟度別クラス編成による習熟度の低いクラスへの対応の強化、アドバイザー（教員）制強化による個別指導の実施、模擬試験成績下位の学生へのサブアドバイザー（助手）の配置、サブアドバイザーの個別指導による効果的な学習方法の確立、学科コモンズへの特別講師の週1回配置による個別学習指導の実施など、きめ細かな国家試験対策を実行した。その結果、模擬試験の偏差値は昨年度よりさらに向上し、学生の苦手科目の解消もできた。

## 心理学科

心理学科では、平成28年度入学生対象から実施する学科改革案を以下のようにまとめ、理事会および大学運営委員会の了承をうけた。平成26年度は、この実施に向けてカリキュラムモデルの作成や授業内容の見直しなどを行った。また、出口保証をより充実させるために、従来希望が多かった保育士資格の申請を行った。具体的な内容は、以下のとおりである。（改革案概略）

### 1. 学生興味と進路が直結したカリキュラムモデルの創設

～心理学を楽しく学んで、未来設計！（仮称）（その概要）

社会で健全に活躍し続けるために「こころの健康」を維持する知識・スキルの習得と心理学の普遍的な面白さや専門性を学習できることを基本に据え、それに加えて「ヒューマン・ケアのための心理学」「子どものSOSに応える心理学」「社会・職場で活かす心理学」の3カリキュラムモデルを設定することで、将来自分が活躍したい分野で、必要となる心理学の専門的知識・スキルを資格と連動して学習できる課程を編成した。これにより興味と出口保証の一体化をはかることが、より具体的に可能となった。

（特徴）

- ・学問領域にとらわれない主題テーマの中で、各学問領域の長所を生かし連携することで、多角的な授業内容が展開できる。また、教員は専門分野を超えて関連する授業を協力して運営することで、学生の興味・関心に沿ったより深い多様な内容の授業が展開できる。→各担当者による授業内容の改善と学科全体の授業内容の連携と整合性について学科検討会で定期的に点検する。

- ・明確な将来設計を描きながら、その目的のためにはどのような学習が必要か？ということが明確に学生に提示できる→モチベーションの維持・向上につながる。
- ・授業の専門化・レベルについては、いずれのモデルにおいても主に3・4年生から始まる資格関連科目において適切に対応可能である。
- ・アンガジュマン（社会参加）型授業の創設→自分の興味あるテーマや資格に応じて、インターンシップ的な授業を展開する→モデルごとに将来設計の具体的な体験学習が可能で、自分の未来設計について適性を持っているかどうかの内省と自覚醸成が可能である。
- ・資格志向への対応が可能である。

## 2. 保育心理士の復活と子どものSOSを適切にキャッチ・サポートする保育士養成の創設

上記カリキュラムモデルのうち「子どものSOSに応える心理学」に連動する主な資格は保育心理士および保育士とする。学生の興味関心が高い「子ども」のカリキュラムモデルにおいて、上記資格をめざすことによって、より汎用性の高い出口保証が可能となる。

- ・保育士資格をだすことで、大谷保育協会認定資格・保育心理士養成復活や日本保育医療学会認定・医療保育専門士への道が開ける。（勤務先は、主に医療・福祉現場）
- ・心理学系の臨床心理士養成（大学院）に加え、4年生で取得できる福祉系（精神保健福祉士）と教育系（保育士）の資格を取得可能となる→心理学科で両方出しているところは希少。
- ・これまで、心理学科では保育心理士養成（保育士資格を持っていることが前提）や親子教室（これまでは、大学院生が主体であるが、アンガジュマン型授業において学部生の加入を促進する）を運営してきた実績と経験値があり、子どものSOSを適切にキャッチ・サポートできる保育士養成の教育的基盤と土壌がある。

### 医療福祉学科

本学科は26年度より開設され、言語聴覚専攻（定員40名）、社会福祉専攻（定員40名）であり、26年度入学者は言語聴覚専攻44名、社会福祉専攻21名（退学1名）である。両専攻とも入学生は各専門職就労への希望が強く、日常の学習態度も非常に熱心である。学部、学科内では、「専門職の連携」、「医療福祉連携論」科目を代表に、医療福祉現場で求められる連携機能の重要性について養成教育段階においても積極的に導入し、学生への理解を図っている。また、両専攻とも4年生次における国家試験合格への事前教育を取り入れ、初年次から意欲を高めて、個々の学生たちが積極的に取り組む工夫を行っている。



## 「短期大学部」

短期大学部全体としては、昨年度までに定着させたディプロマ・ポリシー、カリキュラム・マップに基づく到達目標を重視した教育をさらに進めるとともに、社会人基礎力を育成するための教育改革を積極的に進めた。また、学生が自ら PDCA サイクルのツールとして開発した短大ポートフォリオシステムも安定して運用することができた。その他、ライフデザイン、こども保育両学科共通の取組みとして「伝統文化の講演・こころの講演」を実施した。

### ◆ 学生自らの到達目標達成度の振り返り

到達目標型教育を行うにあたっては、学生自らが各授業の到達目標に対する達成度を自己評価すること、またその自己評価を教員が認識していることがきわめて重要である。そこで、「達成感ポートフォリオ」を用いて、前期終了時に、各科目の到達目標に対する達成度の自己評価、その理由を記述させた。また、それらの結果を教員へフィードバックし、それぞれの授業改善への参考とした。

### ◆ 文部科学省「大学教育再生加速プログラム」に採択

本学において社会人基礎力を育成するためのアクティブ・ラーニング導入の取り組みは、「社会人基礎力育成グランプリ 2104」で準大賞を受賞し、さらに「社会人基礎力を育成する授業 30 選」（経済産業省主催）に選ばれるなど成果を上げてきた。このほど、これらの実績を踏まえ、さらにアクティブ・ラーニングをさまざまな分野に拡大し、同時に学修成果を可視化するシステムを構築する計画が、2014 年度の文部科学省「大学教育再生加速プログラム」(AP)の一つとして採択された。2014 年度は、AP の開始年度として、実施体制の整備、カリキュラム開発のための調査・研究を行い、次年度以降の飛躍のための土台を作った。

### ◆ 短大ポートフォリオ

短大ポートフォリオは Web をベースとし、次の 4 つのポートフォリオから構成されるシステムである。

- ・週間ポートフォリオ: 週単位で PDCA サイクルの習慣をつけることを目的とする。1 年前期に毎週初めにその週の目標を記述し、日々の活動を記録するとともに、週末に目標に対する達成度の評価、総括を行うものである。学生と教員のコミュニケーションツールとしても効果を上げている。
- ・学期ポートフォリオ: 週間ポートフォリオが週単位なのに対して、学期単位での PDCA サイクルを目的とする。それぞれの学期の終了時に、前の学期に立てていた目標に対する総括を行い、次学期の目標をたてるものである。
- ・達成感ポートフォリオ: 前項に記したように、授業の到達目標に対する総括を行

うものである。

- キャリアポートフォリオ：学生が自分史やイベント等に参加した体験など学生生活の記録をキャリアポートフォリオ上に記録として残し、蓄積させていくデータベースである。記録を積み重ねていくことで、自分の成長を感じ取り、目標や課題を見つけるきっかけにすることを目的にしている。

#### ◆ 伝統文化の講演・こころの講演

短期大学のライフデザイン学科、こども保育学科両学科共通の取組として、以下の「伝統文化の講演・こころの講演」を実施した。

- 講演会「生きているだけで価値がある」（平成26年6月20日）  
講師：松田陽子氏 シンガーソングライター、本学客員教授
- 「七夕によせて」－人形劇講演と影絵－（平成26年7月4日）  
講師：NPO 法人むむのこ
- 講演会「自他肯定感が高まる科学講座～いのち・からだ・こころのいとなみを知ろう！～」(平成27年1月23日)  
講師：喜多敦子氏 大阪市立大学大学院看護学研究科教授

#### ◆ ライフデザイン学科の教育改革

地域総合科学科のメリットを活かし、毎年社会のニーズに合わせカリキュラムの改革を行っている。学生にバランスのよい履修を促す目的で、必修科目と選択科目の他に選択必修科目を設置し、ライフデザイン・スタンダードに分類される社会人力を涵養する科目を選択必修科目として設定した。また新たに地域連携実践演習Ⅰ・Ⅱとドクターズクラーク・調剤報酬請求事務・ケアクラークを追加し、PBLを主とした教育や資格取得の幅を増やすことによって、社会のニーズに応える学生を育てることが可能となった。

#### ◆ こども保育学科の教育改革（平成26年度）

保育者にとって最も重要なスキルの一つがピアノの演奏能力である。ピアノの演奏に不安のある学生は、実習でかなり辛い思いをする。特に、2年生になってからの本実習でその傾向がみられる。そこで、今年度も、1年生でピアノ演奏に課題のある学生を対象に、3月、保育実習Ⅰ終了後、3日間にわたって「ピアノ特別講座」を開講し、実力アップを図った。また、2年生担当の「ピアノ奏法Ⅱ」と「ピアノ奏法Ⅲ」は選択科目であるが、学科の方針として、平成26年度も履修を強く奨励したところ、ほとんどの学生が履修し、ピアノを苦手としていた学生もかなりのレベルに達し、教育上の効果が上がった。また、例年は新入生を対象に「ピアノ初学者講座」を開いているが、次年度はこども教育学科への移行の年で、カリキュラムが大幅に変わ



り、1年前期は音楽理論と声楽を学ぶことになるので、「ピアノ初学者講座」の時期は、入学前ではなく、入学後の夏休みに変更した。

英語Ⅰの授業（非常勤講師担当）で「保育英検」の内容を含めて教えてもらうように変更するとともに、準備講座（保育英検協会から講師を派遣）を前期試験終了直後に開催したところ、昨年の倍以上の学生が受講し、多くの合格者を出した。

昨年度に引き続き、観察実習を引き受けていただいている実習園の先生方をお招きし、懇談会を開いた。昨年度は急ぎよ始めたこともあって、年度末に行ったが、今年度は、10月末に、学生の観察実習報告会に引き続いて行った。ご参加いただいた実習園の園長先生・主任先生には、学生の報告会にもご参加いただき、ご指導いただくとともに、学生自身が実習をどう受け止めているのかをよくお聞きいただいたうえで、学生の実態や実習についてのご意見・ご要望を伺った。

### ② 教育の質の向上への取組み（FD※1）

日本学術振興会による大学教育再生加速プログラム（AP）に採択され、平成26年度から平成30年度の5年間、補助金を有効活用して全学的なアクティブラーナーの育成に取り組む。今年度は、11月に採択キックオフシンポジウムの開催、学習ステーションでの授業外学修支援の構築などに取り組んだ。

2月に「アクティブ・ラーニング」のテーマでFD講演会・研修会を行った。講演会では、外部講師が、アクティブラーナー育成の心理学的的方法論、本学の学生インタビューの分析結果、他大学の取組事例などを紹介した。研修会では、本学の専任講師が、学習ステーションと連携した授業外学修支援、国家試験受験に向けた学習支援、ソーシャルアクションによるプロジェクト学習などの取組事例を報告した。参加教員は、研修会後に振り返りレポートを作成・提出し、今後の授業改善やFDにつなげる。

※1 FD (Faculty Development)…大学教育改革のための組織的な取組み。

### ③ キャリア教育の推進（キャリアセンター）

キャリアセンターでは、初年次から着実に社会人としての「こころ・知識・能力」を身に付けるためのキャリア教育推進と、個々への就職活動を支援する就職支援のもと、教職協働による組織運営を行い、一人ひとりに向き合った学生支援を実施した。正課授業でのセンター員によるキャリア教育啓発も、この一環として強化した。

「まずは訪問、まずは相談」を周知し、学生がどのような社会・職場においても自信と目標をもって取組み、対応できるよう、i) 丁寧なキャリア形成の相談・指導に重点をおき、一人ひとりの適性・能力を見出し、ii) 適切なキャリア教育プログラムを提供・推奨することにより、iii) 就労意識・意欲を高め、iv) 社会人の基礎的能力として求められるコミュニケーション力・問題発見・解決力、プレゼンテーション

ン力を養い、さらにセンター内の資格コーナーでは単に資格取得を勧めるのではなく、資格取得への過程で得られる自己研鑽の価値も訴求、資格対策講座を開講すると共に、有意な資格取得に努めるよう相談・指導を行った。

具体的なプログラムとして、企業等での就労体験「インターンシップ」、企業・NPO 団体とのコラボによる全学的 PBL 型（課題解決型）企画、企業訪問研修、ボランティア活動、キャリアアドバイザーによるビジネスマナー講座・個別相談などを実施・推進した。

また、「社会人基礎力育成グランプリ」近畿地区大会の地区事務局を2年連続で引き受け、学生実施前準備、開催会場運営を円滑に実施し、学外に対し本学の存在・役割を訴求すると同時に、学内に対しこのイベントへの認識強化につなげることができた。

#### ④ 生涯学習の支援（地域連携推進センター）

地域連携推進センターでは、一般の方々に生涯学習の場を提供するために、本学の学部学科の教育の特性を活かした聴講無料の夏期公開講座（6～7月）秋期公開講座（10月）と、特別公開講座（2月）を開催、これらは、「右京まちづくり大学リレー講座」と位置づけて実施した。さらに、暮らしを豊かにする講座として、文学や地域の文化・産業に学ぶ教養講座（有料）を年間24回開講した。

##### ◆教養講座

講座名	開催日	講師	受講者数
源氏物語を読む	通年金曜日 (月2回/年間24回)	山本登朗(本学名誉教授/関西大学教授)	141名

##### ◆情報教育センター第22回公開講習会

講習名	開催日	講師	受講者数
LINE入門	平成26年9月27日(土)	阿部一晴	105名

##### ◆夏期公開講座

講座名	開催日	講師	来場者数
こころの健康	平成26年6月21日(土)	竹西正典・鳴岩伸生	157名
地域の環境問題 ～今、何が起きているのか?～	平成26年7月5日(土)	高野拓樹・ 田中清秀(京都市環境政策局 循環型社会推進部 西部まち美化事務所所長)	227名

◆秋期公開講座

講座名	開催日	講師	来場者数
今、生を充実させること ～医療と福祉の連携が織りなす 本当の支援とは～	平成 26 年 10 月 25 日 (土)	中村仁一 (老人ホーム「同和園」付属診療所 所長)	239 名

◆特別公開講座

講座名	開催日	講師	来場者数
ヒラリーの挑戦 ～誕生するか? アメリカ初の女性大統領～	平成 27 年 2 月 28 日 (土)	脇田哲志	126 名

⑤ 国際交流事業

多彩な留学や研修プログラムにより海外へ学生を派遣するとともに、外国人留学生や研修生を多数受入れることにより、国際交流の活性化を図った。

◆ 派遣

長期留学	オーストラリア・スィンバーン工科大学	参加者 1 名
	イギリス・ニューカッスル大学	参加者 1 名
semester留学	オーストラリア・スィンバーン工科大学	参加者 1 名
短期大学部留学	カナダ・リジャイナ大学	参加者 2 名
ポートランド州立大学夏季英語研修		参加者 5 名
CQ 大学春季英語研修		参加者 2 名
韓国語研修		参加者 7 名
韓国文化研修		参加者 2 名
台湾文化研修		参加者 10 名
アメリカ栄養士研修		参加者 8 名
オーストラリア看護研修		参加者 10 名

◆ 受け入れ

外国人留学生在籍数	大学 31 名、短大 0 名
リジャイナ大学日本語・日本文化研修	参加者 13 名
韓国蔚山科学大学日本語・日本文化研修	参加者なし
韓国蔚山科学大学日本文化体験	参加者なし
韓国蔚山科学大学看護学科日本研修	参加者 10 名
ブエナビスタ大学日本研修	参加者 13 名
韓国南海大学日本語研修	参加者 10 名

◆ 交流

国際交流の集い	11月ミシガン州立大学連合留学生を迎えて	参加者 87名
YMCA 台湾大学生日本研修	茶道部・箏曲部による日本文化体験提供	参加者 26名
英会話ラウンジの開催		



リジャイナ大学日本語日本文化研修（本学での日本文化体験）

◆ 交流(英会話ラウンジ)

毎週木曜日お昼休みに開催 年間 29 回実施 参加者 延べ 196 名

⑥ 研究活動支援

◆ 学内の先端的研究及び成果に対する支援

本学の研究活動支援としては、「特別研究」、国内の大学・研究機関等での「国内研究」、海外の大学・研究機関等での「在外研究」、「学術出版助成」、「学会発表補助」、及び「学長・学部長裁量研究費」などがあるが、こども教育学部・看護学研究科を 27 年度開設するための準備、「大学教育再生加速プログラム (AP) ※」に大学・短期大学部とテーマ別でダブル採択されたこともあり、「在外研究」については凍結している。一方、「学長裁量経費」として、教育の質向上に向けた大学教育改革に関する優れた教育の取り組みを支援・育成し、本学の教育・研究の活性化を図ることを目的に「大学教育改革支援」を行っている。また、各学部における教育・研究活動の活性化を図ることを目的に、学部長裁量の「学部研究費」の支援を 26 年度より開始した。具体的には、学部内・学部間での共同研究、学部・学科における組織的な FD 関連事項、学部教育を向上させることとし、「個人研究費」とあわせて、教育力の強化・改善、基礎から応用までの幅広い研究の向上を図った。

◆ 文部科学省の競争的研究資金への応募・獲得

学内の研究活動の活性化をはかるとともに、科学研究費の申請を積極的に行い、研究活動に役立てた。なお、平成 26 年度は大学・短期大学部あわせて 7 件が採択された。(大学：申請件数 19 件/採択件数 6 件、短期大学部：申請件数 3 件/採択件数 1 件、合計申請件数：合計 22 件/採択件数 7 件)

#### ◆ 学内教学予算と重点分野

学長執行体制の管理運営の下に教学予算等の検討を行い、大学運営会議の検討を踏まえて、「学士力の向上」「社会人基礎力の養成」「初年次教育の充実」「FD の組織的展開」等を目指す施策を講じた。また、前述の通り、「大学教育再生加速プログラム (AP) ※」に大学・短期大学部とも採択された。大学は知識やスキルの修得に向けて主体的に行動ができる女性を育成するため「アクティブ・ラーニング (AL)」を推進し、「学習・学修マネジメント力」を向上させる学習支援体制を全学的に展開していくことを目標としており、短大はさまざまな科目に AL を導入し、学生の学びがどこまで進んだかをわかりやすく示すことで、人格と教養に優れ、社会人基礎力と専門的能力に秀でた女性の育成を目指すこととしている。

※「大学教育再生加速プログラム」は、AP (Acceleration Program for University Education Rebuilding) といわれ、国として進めるべき大学教育改革を一層推進するため、教育再生実行会議などで示された、新たな方向性に合致した先進的な取り組みを実施する大学支援を目的とした、文部科学省主導のプログラムである。

### (3) 学生の支援に関わる活動

#### ① エンロールメント・マネジメント (EM※<sup>1</sup>) の取り組み

##### ◆ EM・IR 活動の体系化・組織化

EM の統括及び IR※<sup>2</sup>を担当する専門部署である EM・IR 部を軸に、EM に体系的・組織的に取り組んだ。

※<sup>1</sup> EM (エンロールメント・マネジメント) …入学前から在学中卒業後までを一貫してサポートする総合的な学生支援策

※<sup>2</sup> IR(インスティテューショナル・リサーチ)…入学前から卒業後までの各ステージにおいて、学生諸活動を支援するための施策に関する調査・分析

##### ◆ 事実 (データ) に基づく戦略立案・実施へ向けた IR の推進

より適切で効果的・効率的な学生支援を実現するため、その立案・実施のための情報収集と分析を推進した。平成 26 年度は、IR のための学内データの体系化 (京都光華 IR 辞書の構築) や授業外学修時間と GPA・学習意欲の関係分析など学習成果の可視化に取り組んだ。

##### ◆ 個々の学生の総合的把握と支援のための情報共有

一人ひとりの状況に対応した学生支援を実現するため、成績、出席状況、学生の意識・態度・志向性、授業への参加状況、生活状況など総合的に把握する「総合アセスメント」を実施。合わせてクラスアドバイザー、学科、関係部局 (学生サポートセンターなど) で情報共有する仕組みを整え運用を始めた。

#### ◆ 学生の就学・修学支援

学生が安心して学生生活を送り学修成果を上げることを支援するため、これまでの取組みを継続するとともに、特別な支援を必要とする学生を把握し、必要な支援を実施するトラッキングサポート※<sup>1</sup>、個々の学生の状況を把握し個別指導を行うクラスアドバイザー制度、学生同士で支え合うピアサポート※<sup>2</sup>、経済支援、学生生活支援などを実施した。

※<sup>1</sup> トラッキングサポート…個々に合わせたサポートチームを作り、迅速に問題を解決する

※<sup>2</sup> ピアサポート…同年代の友人が友人をサポートする

#### ◆ 教育の質向上のための教育充実策

教育の質向上を目指して、カリキュラム改革、授業方法改善、教員研修などに、FD・自己点検評価委員会とともに取り組んだ。平成26年度は特に、初年次教育の充実・強化、学生の授業評価の改善、アクティブ・ラーニングの推進などに取り組んだ。その中で、文部科学省の大学教育再生加速プログラム（AP）に大学・短大のとも採択され、アクティブ・ラーナーの育成及びアクティブ・ラーニングの活性化と学修成果可視化システムの導入に取り組むこととなった。また、正課を超えた自由な学びを提供する課外ラーニングコミュニティ（愛称「学Booo（マナブー）」※）を継続して実施した。さらに、正課外の学生のアクティビティー強化のために、新しい学生リーダー組織の育成に取り組んだ。

※ 学Booo（マナブー）…授業外で教職員と学生が少人数で一緒に興味あるテーマを勉強する

#### ② 学習ステーション・コモンズ等学びの環境整備

平成26年度大学短期大学部教学改革の本格実施にあわせて、学生の自主・自律的な学習を促進し、学習時間の質、量の増加を目指し、キャンパス内に自学・自習や協同学習等に対応した学習施設が本学では複数設置されている。

賢風館1階には、学習に関する全学的な支援と学生の自学・自習や、アクティブ・ラーニング等に対応した学習設備が備わった「学習ステーション」が設置されている。「学習ステーション」では、専任の職員2名が常駐し、履修相談、基礎科目を中心とした学習相談や課題支援等を行い、広く学生の学習支援を行っている。職員だけでなく専任教員も学習アドバイザー（兼任）として3名配置し、学生が専門的な学習支援を受けることが可能な体制が整えられている。さらに、ピア・サポーター制度を導入し、上級学生が下級生を支援する体制を設けた。今年度は、オリエンテーション期間に履修登録相談会を開催し、下級生からの履修に関する相談や、学習方法などの相談に対する学習支援を行った。また、「学習ステーション」では、平成26年度文部科学省にて採択された大学AP（大学教育再生加速プログラム）事業と連携し、後期授業科目「数と計算」「仏教の人間観II」の課題支援の取組みを実施した。そ



の他、基礎学力の向上を目指した学習講座や、英語絵本の読み語り会のイベントを開催するなど様々な学習を全学的に展開、発信する場として活用されている。

今年度は、前期期間が1日平均約74名、後期期間が1日平均約79名の学生が利用しており、主に、友人同士、グループで話しながら協同学習する学生と一人で静かに自学・自習する学生が多く見受けられた。今後は、学生の学習形態に応じた学習空間の利用運営の在り方を、検討していく必要がある。

設備については、個人およびグループでの学習が行えるよう、貸出PCなどの必要な設備を配備している。貸出PC保管庫も設置し、職員不在時でもPCの貸出を学生証のみで対応することが可能となっている。さらに、「学習ステーション」内にはアクティブ・ラーニングに対応したラーニングルームを設置し、グループワークの進め方やレポートの書き方など、学習方法についてのセミナーを学習アドバイザー中心に実施しているところである。また、このスペースでは、プレゼンテーション演習、グループワーク、PBL等の授業や学習が行われている。

「学科コモンズ」は、キャリア形成学科（賢風館4階）・文学科（賢風館4階）・健康栄養学科（5号館1階）・看護学科（聞光館5階）・医療福祉学科（慈光館5階）・心理学科（慈光館4階）・ライフデザイン学科（5号館2階）・子ども保育学科（賢風館5階）にそれぞれ設置し、専門課程における学習が効果的に行えるよう環境整備が行われている。具体的には、授業前後の準備学習（予習・復習）や専門学習に必要な学習設備が整備されている。また、コモンズ空間の周辺には学科の専任教員の個人研究室を配置し、学生は随時、自由に担当教員へ相談し指導を受けることが可能となっており、専門課程における学習成果の向上が図られている。

図書館（徳風館）1階にも、主に専門課程を対象とした、図書・インターネット等の学習情報を活用出来る協同学習空間を設置した。2階・3階には、個人で集中して勉強できる学習設備を導入し、個別学習空間の充実を行っており、学生の学習ニーズに対応した学習空間を提供している。

これらの学習施設の設置あるいは、設備の充実によって、学生は授業で課せられた課題や資格取得のための自学・自習等を効果的に行うことができ、授業の合間や授業後にこれらの施設を利用し、より主体的な学習が展開されている。さらに、それぞれの場所で学生が集まることで、別の学生を引き寄せる好循環が生まれ、多くの学生の学内滞在時間が増大するとともに、学生が自主的・自律的に学習する傾向がより一層高まり、主体的な学びの増進と学習成果の質・量の向上につながっている。今後も、引き続き、学内の学習空間の充実化を検討していくこととしたい。

### ③ 就職支援

学生一人ひとりへの個別支援に重点を置き、キャリア教育との一貫した体制のもと、教職が協働してマンツーマンの指導を進めた。求人情報の探し方、エントリーシー

ト・履歴書の書き方、筆記試験・面接対策の講座、先輩の就職体験談、企業で活躍する卒業生を囲む懇談会、企業研究セミナー等を開催するとともに、教職一体となって就職活動のフォローを行い、きめ細かく行き届いた就職支援に取り組んだ。また、求人企業の開拓、求人情報の収集に努め、学生個々人の携帯メールへの配信を行うとともに、公的機関と連携しつつ地域の優良企業をはじめとする企業とのマッチングを推進した。その結果、大学全体としての就職率（対就職希望者）は95%、短期大学部は98%となり、昨年とほぼ同じ高い就職率となった。

#### ④ 課外活動

クラブ活動においては福祉施設に出向き、お年寄りに踊りの講習会を開き、施設の方々と交流を図る“京炎そでふれ華羅紅”は2年連続して右京区まちづくり支援制度に採択された。茶道部では台湾で行われた茶会において点前を披露し国際交流を行うなど積極的な活動を行っている。クラブ活動は顧問（教員）の指導や学生が明確に目標を定めて取り組むことでより成果を出せるので学生サポートセンターは今後も団体顧問および学生と連携を図りながら支援をしていく。平成25年度より学生会活動の支援強化を図っているが、学生交流の企画を年間4回実施できたことで学科、学年を超えた交流が実現できた。恒例の“七夕まつり”では浴衣での登校や願い事を叶える企画など企画内容を一新したことで参加者数が増大した。初の企画として行ったスポーツ大会では130名の参加者があったことから更に大学祭に次ぐ大きな行事に発展するように学生支援を継続する。大学祭を企画運営するあかね祭実行委員とも連携を図り、例年以上の約3,000名の来場者があった。今後ますます発展し地域の方々から親しみやすい大学祭に学生とともに考案する。

#### ⑤ 多様な学生ニーズへの対応

修学支援が必要な学生に対して、学生生活をスムーズに送れるようクラスアドバイザー、学生部長、保健室、学生相談室の連携の下、的確な対応を推し進めている。平成26年度より学生サポートセンター内にソーシャルワーカー（SW）資格保有職員を配置し、学生支援担当者として専門的知見から学生支援を施せる体制を整え、保護者との連携もよりきめ細かく行うことで学生支援の充実が図れた。経済面の支援充実のために日本学生支援機構奨学金を始めとする学外奨学金および本学独自の奨学金については、募集時期にあわせて光華ナビ・掲示板で周知する他に説明会をすべての奨学金制度において実施し、制度の特徴や手続き方法など説明するところで各種奨学金の利用しやすい環境作りを進めている。



## ⑥ 地域との共生・連携

大学祭において地域出店枠を設け希望者を募るなど（H26年度の出店は2店舗）地域の方から親しみを持っていただける大学祭を実施した。次年度は出展募集を早期に行うなどの工夫を図り更に出店数の増加と地域住民の来場者増加を図ることで地域との共生を更に深化させる取り組みを推進する。

また、地域連携推進センターを核として、地域企業連携、地域行政（市民）連携、地域連携プロジェクト科目の推進、地域と連携した環境教育の推進、高大連携などを中心に取り組みを強化した。右京区との連携については、右京まちづくり大学リレー講座に参加して講義をおこなった。また、右京区まちづくり支援制度「大学・学生枠」支援事業には本学が5件採択され、さらに「学まちコラボ事業」には2件が認定され、学生が活発に活動した。その他、右京区民ふれあいフェスティバル等にも参加し、学生と地域とが一体となり取り組みを推進した。

## ⑦ 管理運営の強化

学長を議長とし、副学長、学部長、研究科長及び事務局長、学務企画部長、学生サポートセンター長など主要メンバーで構成する大学運営会議で重要案件を審議し、その結果を各学科の代表である学科長や学部から選出される代議員などで構成する全学代議会議に提案・報告することで、学長のリーダーシップのもと、大学改革の推進を目指してスピーディーで効率的な教学運営がなされた。

また、大学運営会議には経営サイドもメンバーに参加しており、経営と教学とが連携した円滑な大学運営につながった。この他、前年度に引き続き、学部・学科の改組、学生支援や教学支援、大型補助金の獲得等については、適宜、教職協働のワーキンググループ等を組織して検討した結果を大学運営会議で審議して成案を取りまとめた。

### ◆ 学長の執行体制の強化

学長は「大学運営会議」、および「全学代議会議」の審議事項を含め、大学運営に関する責任と権限を有しているが、副学長、学部長、学科長の役割・権限・責任についての更なる明確化を図り、教育充実策や学生支援策を講じて教育の質保証に努めた。

### ◆ 専門委員会の効率化

「大学運営会議」「全学代議会議」「学部教授会」は属する専門委員会との連携を強化し、各種の正課内外の活動を支援する教職協働での取組みを強化した。

## ◆ 大学のガバナンスの見直し

本学は、平成 22 年度より、学長のリーダーシップによる意思決定の迅速化を図り、学部・学科の改組転換・新增設や廃止などが着実に実現し、大学改革を推進してきた。平成 27 年度、学校教育法が改正され、それに伴い、学長を中心としたガバナンス体制として、審議機関としての大学運営会議と最終決定権を持つ学長の役割を明確にした。また、学長の意思決定をサポートする副学長体制の強化、及び教授会が審議する事項・役割を明らかにすることで、大学の管理運営の強化を図っていく。

## ■ 高等学校・中学校

### (1) 生徒の募集に関わる活動

「全校あげておもてなし」をスローガンにオープンキャンパスを 4 回（伝統文化学習発表会と同時開催を含む）・入試説明会を 4 回実施した。これらの時には、オープニングから受付や司会から案内・説明など生徒たちの手によって行ってきた。来校された保護者や児童生徒の皆さんにはとても良い印象を与えることができ、来校していただいた生徒の受験率は高くなっている。

小学生対象には、中学校での授業体験やジュニアクラブと称して中学生との関わりを増やす取り組みをした。また「サタデーイングリッシュクラブ」を 9 月より年間 6 回実施し、チャンツやゲームで楽しく英語を学ぶ場を提供した。

入試部による中学校訪問では、京都市内各校 9～16 回の訪問、京都府・滋賀県・大阪府には 5～13 回、また塾訪問においては、各担当者がそれぞれ延べ 300～600 回の訪問を行った。

また、外部での説明会（私立中学フェア、私学フェア、私立中高展など）にも可能な限り全校体制で臨み、教員一人ひとりが生徒募集の現場に立ち、組織の一員として危機感を共有した。事前研修も行い、声のかけ方、お礼の言い方、プレゼンなどのスキルの向上にも努めた

### (2) 教育の質の向上に関わる活動

3 年目を迎えた NIE<sup>\*1</sup> 活用の取組も定着し、生徒が新聞を取り上げ自己の意見を発表する授業を多く取り入れ、情報活用力や思考力また表現力をつけた。また、京都大学・長浜バイオ大学との共同取組で行った SPP<sup>\*2</sup>（サイエンス・パートナーシップ・プログラム）のポスター発表では、生徒たちの自信に満ちたいきいきとした姿がみられた。昨年度に続き、第 2 回 SSH 環境・エネルギー学会 in OBAMA に参加し大きな経験ができた。またサイエンスキャスルや、大阪府立大学で行われたハイスクール放射線にも参加し、ハイスクール放射線では審査員特別賞を受賞した。

中学生においても、希望代表者が瑞浪超深層研究所見学や浜岡原子力発電所見学・討論会に参加し、帰校してからその様子や考えたこと等を学年のみんなに伝え、共に考

える時間を持つことができた。

全教室に電子黒板導入し1年半、生徒たちの理解を深めるために、ICT機器の有効活用を目指して研修を積み、日常的に授業の中で活用した。

文部科学省より「英語教育強化地域拠点事業」の採択を受け、小中高を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより英語によるコミュニケーション能力を養うなどを目指して取組を行った。中学校においては発信型授業に力を入れ、1年生からテーマを与えポスター発表等で習った文型等を使って、質問を受け答えする等やりとりをする場面を多く作った。また高校でも小中の取組を踏まえて、言語活動の「高度化」した目標に向かって授業の工夫を行った。

高校総合進学ライラックコースでは、平成26年度より高大連携による、アート・デザイン・プログラムの新設やこども教育・キャリア・看護栄養等のプログラムの充実に向けて、京都造形芸術大学との授業を8回行った。「見る・考える・話す・聴く」など人が持っている基礎的な能力を「対話型授業」で、観察力・批判的思考力・言語力・コミュニケーション力など総合的に「生きる力」を育むプログラムを実施した。生徒たちの集中力や聴く力など変容が見られた。

中学においては、少人数授業、特に国数英の3教科においては、習熟度別授業を展開し、基礎基本の確実な習得と活用を目指した。さらに、中学生の自主的な活動時間（光華タイム）を設け、自信と集団意識を高めることができた。

また、各種検定にも力を入れ以下の実績をあげた。

- ◆ 英語検定準1級合格者（高校1名）
- ◆ 英語検定2級合格者（高校15名・中学1名）
- ◆ 英語検定準2級合格者（高校49名・中学10名）
- ◆ 漢字検定2級合格者（高校16名・中学4名）
- ◆ 漢字検定準2級合格者（高校43名・中学10名）

※1 NIE（Newspaper In Education）…学校教育の場で新聞を活用して学習すること

※2 SPP…独立行政法人科学技術振興機構が支援する科学・理科・数学などの分野の観察・実習・体験等学習活動の支援プログラム

高校学校行事の目玉である「修学旅行」についても、改革を実施した。観光旅行化していた高校の北海道修学旅行を香港マカオへと行き先を変更し、「研修旅行」と改めることで、プログラムの内容も大幅に見直した。学校交流、自主研修、B&Sシステムの導入や事前研修の充実、研修発表会の実施など、生徒達は受け身の「修学旅行」から自主性・思考力・判断力・コミュニケーション力をつける「研修旅行」を体験することとなり、大きく成長することができた。

### (3) 教員の指導力向上に関わる活動

全教員、全教科で対話型学習を展開することを目指して、授業づくりに力を入れた。教員相互に交流し合う公開授業月間の取組みや、教科内研修など、学力向上、女子に適した指導方法の確立に向けて取組みを進めた。

平成 26 年度は、英語教育強化地域拠点事業はじめ NIE (新聞を教育に)・SPP (サイエンス・パートナーシップ・プログラム)・文部科学省京都外国語大学との共同研究「中学英語」や特別支援教育総合推進事業など多くの研究指定を受け、教員集団がそれぞれ研修会への参加や課題に取り組む研修に力を注いだ。

校内研修はもとより、校外研修会・先進校視察にも数多く参加し、全教員に伝達研修を行い、共通理解を行ってきた。

### (4) 進路指導 (進学支援) の強化

キャリア教育充実を目指して、学級の時間はじめ保護者会や進路説明会など年間計画に基づき実施してきた。特に、将来を見据えるため、身近な卒業生で活躍している先輩の声を聴く講演会の実施については、効果的であった。

中学においても 1 年から 3 年まで、計画的なキャリア教育を推し進め、学校訪問や地域訪問また職場体験など学校外での活動にも力点を置いた。

就職希望者には、高校 2 年生のはじめから特別講座を設け夏には、企業の協力により職場体験を実施し、社会の現実を味わった。また、高校希望者には 12 月に職業体験セミナーの参加を呼びかけ 110 人の生徒が参加し、好評であった。

生徒は、午前 7 時から午後 7 時まで進学支援センターで、個々のスケジュールに合わせて自主学習を熱心に行っている。高校プリムラコースについてはそれらに加えて、長期休業中の学習合宿はじめ 8、9 限に「光華ゼミ」を実施し放課後の学習の充実度を増した。高校ライラックコースについても、放課後「基礎ゼミ」「チャレンジゼミ」を行い自主的で意欲的な学習が定着する環境を整えた。

進学実績は、大学進学が 68.3%、短期大学進学 8.5%、専門学校が 12.7%であった。

内部の京都光華大学・短大への内部進学率は 33.3%の割合を占めた。国公立大学合格者 22 名(浪人を含めると 24 名)と昨年度より大幅に増加した。特に薬学・看護・理工系の進学者が増加した。関関同立にも昨年同様の合格者を出した。ライラックコースにおいても関西有名私立大学への合格者を出した。

### (5) 課外活動

体育系クラブでは、高校スキー部：全国高校選抜 4 位入賞、近畿高校総合 14 連覇、インターハイ・国体出場 高校バスケットボール部：京都府高校新人大会 3 位 高校バレーボール部：京都府高校新人大会準優勝 高校陸上部：京都府高校駅伝 6 位 高校ソフトテニス部：京都府高校団体準優勝 中学ソフトテニス部：全国中学 5 位入賞、

京都府中学団体優勝・個人優勝 中学陸上部：100m個人でジュニアオリンピック出場  
中学スキー部：近畿中学優勝・京都市中学校体育表彰・京都新聞社ジュニアスポーツ  
賞受賞 中学体操部：近畿ジュニア平均台優勝・京都府スポーツ賞未来くん賞受賞な  
どの活躍があった。

文化系クラブでは、中高吹奏楽部：京都府金賞・関西銀賞・マーチングステージ全国大  
会優秀賞 軽音楽部：近畿グランプリ大会栄誉賞受賞 箏曲部：全国総合文化祭出場  
茶道部：京都府高校総文最優秀校賞 また京都府伝統文化フェスティバルでは、茶道・  
箏曲・華道礼式生けなど大きな貢献を果たした。

## (6) 生徒へのきめ細やかな指導

授業の中で気になる生徒や家庭との連携の中で配慮を要する生徒に関しては共通理解  
を図り、きめ細かな指導に力を入れた。

教室に入りにくい生徒や不登校傾向の生徒に対しては、フリールーム・ホットルーム  
を整備し、SST（ソーシャル・スキル・トレーニング）や造形作業等を取り入れ、教室復帰  
できる手立てを施した。また夏休みや2月には特別授業を開催し、少人数での授業で  
学ぶ喜びと自信をつけさせた。

特別支援教育については、文部科学省からの研究委託を受け、「困り感のある生徒への  
配慮は、ないと困る支援であり、すべての生徒にとってあると便利な支援である」と  
いう視点で、ユニバーサルデザインを意識した授業を進めた。また放課後には、個別  
支援の放課後まなび教室を開くなど個に応じた指導を充実させた。スクールカウンセ  
ラー2名・特別支援員2名・特別支援コーディネーターを配置するなど相談体制も充実  
した。

## (7) 地域との共生・連携

七夕きらきら祭り・伝統文化学習発表会などの学校行事の案内を近隣小中学校や、町  
内会に配布をし、参加を呼びかけたり、学校新聞「京都光華」を幅広く配布し、地域  
との交流を図った。また、生徒会・箏曲部・コーラス部・茶道部・軽音楽部・吹奏楽  
部などは特別養護老人ホームなどの施設を訪問するなどボランティア活動を行ってき  
た。葛野児童館とは毎年、保育授業で交流を行っている。

毎朝、学校周辺道路の清掃活動（門掃き）の実施や、西京極駅での朝の挨拶運動では、  
「元気な挨拶に花をそえて」地域での役割を果たした。

## ■ 小学校

### (1) 児童の募集に関わる活動

- ・学校パンフレットやポスター、新聞チラシ等により光華小学校の魅力を発信してきた。
- ・幼稚園、保育園、進学塾への訪問など、教職員が一丸となって児童募集の活動に取り

組んできた。

- ・光華幼稚園との交流の機会を増やし、募集への働きかけを強められた。また、中高との連携や聞光館などの施設をフルに活用した（お茶会）募集活動を実施し、アピールすることができた。
- ・来年度は、光華幼稚園児の親へのアピールをさらに強めるとともに、光華小学校ならではの魅力を学校パンフレットに掲載し、募集活動に努める。

## (2) 教育の質の向上に関わる活動

- ・子ども達の「言語活動の充実」を図り、創意工夫を生かした特色ある教育活動を通して、生きる力を育む取組を推進してきた。
- ・基礎的、基本的な知識や技能を確実に習得させるとともに、専科を活用した発展的な内容にも取り組んできた。
- ・英語教育強化地域拠点校の指定を受け、全国に先駆け一貫校の強みを発揮し、小中高12年間を見通した英語教育の充実を図る取組を進めてきた。
- ・来年度は、学力の確かな把握とそのデータの効果的な活用を図るとともに、問題解決的な学習と先行学習との住み分けによる効果的な指導計画の充実を図る。

## (3) 教員の指導力向上に関わる活動

- ・教員の授業力を高め、普通授業の充実を図るため、研究部が中心となり授業研究会を実施することができた。
- ・「子どもを丁寧に観る」教師を育てるため、大学教授や専門的な外部講師を招き、生徒指導、特別活動など学級経営に関わる研修を実施してきた。
- ・学年会や生徒指導部会を定例化し、子どもの実態把握及び取組についての全校理解を図ってきた。
- ・来年度は、初任者等の望ましい育成を目指し初任者指導を充実させるとともに、「よりわかる授業」を目指して、先行学習と問題解決学習の実践の質を高める。

## (4) 進路指導（進学支援）の強化

- ・運動会や音楽会等の行事を通して、中学校の素晴らしさを感じる取組を推進してきた。
- ・入試説明会、中学校の授業体験や学習会などを実施し、進学への意識高揚を図ってきた。
- ・模擬テストを実施し、その結果に基づき進路指導を実施した。
- ・来年度は、それぞれの行事への交流を増やし進学したい学校としての憧れ意識を醸成するとともに、学力テストを実施しそれを基にした進学指導の充実を図る。



## (5) 課外活動

- ・一人ひとりの力を高めるために、毎週火曜日と木曜日の放課後、国語科と算数科の学習に取り組んできた。また、理科教室や英語教室にも取り組み、子ども達の意欲・関心を高める助けとなった。
- ・下校時刻から午後6時まで「ゆうゆうタイム」を実施し、安全に楽しく過ごす子どもの姿が見られた。
- ・来年度は、ジャンボ休み時間を新たに作り出すなど、カリキュラムの中で子ども達を確実に高めていくことを最重点として、従来実施してきた課外の活動を見直す。

## (6) 児童へのきめ細やかな指導

- ・「いじめ」等の調査から本校の取組を見直す生徒指導研修会を実施した。そのことが子どもの小さな変化を見逃さない教師の眼を育てた。
- ・発達相談員など外部から専門家を招き、子どもの様子を見ていただき、支援を要する子どもへの指導に対してアドバイスを頂いた。そのことで固定化した考えも変化し、組が充実した。
- ・来年度は、日常から子どもをきめ細かく観察する力を充実させ、全教職員が同じ視点に立って指導できるようにする。そのために教職員の情報共有の徹底を図るとともに素早い初期対応を行う。

## (7) 地域との共生・連携

- ・学期に1回4年生が地域の方々とともに、桂川清掃活動に取り組んだ。
- ・来年度も、地域の清掃活動に参加するなど地域と共に学ぶ時間を作っていく。また、各種コンクールにも積極的に応募していく。

## ■ 幼稚園

### (1) 園児の募集に関わる活動

平成26年9月に3回の入園説明会を実施し72組の参加があった。また、保育見学会を2回実施し、3歳・4歳・5歳児の発達を考慮した保育を59組の親子が見学された。

### (2) 満3歳児保育の試行

保護者のご要望にお応えし、子育て支援として満3歳児保育(5日クラス)を試行実施した。満3歳児保育の教育課程を作成した。初年度は4月～7月生まれの2歳児13名を対象に受け入れ、個人差の大きい2歳児の発達を配慮した保育を行った。

### (3) 特色教育

教育の柱に据えている「絵本教育」は毎日、園児への絵本の読み語りを継続した。全

教員は積極的に絵本研修会に参加し、絵本実践を深め研鑽するとともに、保護者と一緒に“楽しい絵本の会”を開催し、絵本について話し合う場を設けた。また、在園・卒園の保護者・地域の方を招いて“絵本講演会”（絵本作家 長谷川義史氏）を実施。

280名の参加があった。

また、本園独自の絵本ブックリストを新入園児保護者に配布した。

「運動あそび」を推進するため、戸外遊びを積極的に行うとともに各学年体力測定を実施し、運動遊び計画表を基に柔軟な体づくりと体力強化を図った。

更に「食育」では、年長児が主体となり、自園の畑で、12種の野菜と7種の果物を栽培・収穫し、調理して食育活動を実践した。

#### (4) 課外活動

保育終了後の課外活動として「体操教室」（年33回）、「ECCクラブ」（年33回）を実施した。

#### (5) 園児・保護者へのきめ細やかな対応

一人ひとりの子どもの発達状況を把握し、保護者との連絡を密にし、必要に応じて、専門機関とも連携を図り適切な対応を行った。また、就学に向けて特別支援を要する子どもには就学支援シートを作成し、スムーズな小学校生活へ繋げた。

保護者の子育ての悩み等に応えるよう担任や必要に応じて園長・主任も対応に当たった。また、学内カウンセラー（7回）や外部のキンダーカウンセラー（4回）による個別相談を計年11回実施した。

#### (6) 子育て支援の強化

子育て支援として「ほっとステーション<sup>※</sup>」を開催（年10回）し、保護者同士が悩みを話し、子育ての楽しさや喜びがもてるように心掛けるとともに、子育て相談を実施した。また、保育終了後にも安心して子どもを預けられるオリジナルな「預かり保育」（年202回）を実施した。また、保護者の要望による2歳児親子保育「おひさまくらぶ」（年29回）をはじめ、満2歳児親子保育「にこにこくらぶ」（年15回）を実施した。

<sup>※</sup> ほっとステーション…保育中に保護者同士が集い、子育ての悩みや日常の出来事など、いろいろな話題について話し合う情報交換の場。

#### (7) 地域との共生・連携

未就園児（3歳まで）を対象とした地域開放「ワイワイキッズ」を年10回実施し、1,039人の方が参加。また、地域の方との伝承遊び（6月）・及び地域女性会の方を招いてのお茶会（1月）を実施した。

更に、地域小学校との連携を図るため、連絡会（13校）・懇談会（3校）を積極的に実施



した。

#### (8) 幼稚園創立 50 周年事業

- \* 50 周年記念絵本講演会「長谷川義史」氏 (280 名参加)・・・6 月 13 日 (金)
- \* 年少児運動会 「50 周年おみこしわっしょい」・・・10 月 8 日 (水)
- \* 年中・年長児の運動会 「50 周年おめでとうバルーン」・・・10 月 12 日 (日)  
園生徒競走のお祝いに自由帳・お祝い鉛筆プレゼント
- \* 50 周年記念親子人形劇鑑賞 (530 名参加)・・・11 月 1 日 (土)  
年長セレモニー・人形劇「ピノキオ」劇団むすび座
  - ・ 在園児親子・卒園児 1 年生親子とその兄弟ご招待
  - ・ 光華小学校一年生ご招待
- \* 50 周年記念マーティーによる革製品 幼稚園児制服ストラップ作成
- \* 50 周年記念絵本原画展「のあさんのどうぶつえん」平成 27 年 1 月 27 日・28 日両日
- \* 50 周年記念講演会「森脇健児」氏 (140 名参加)・・・1 月 27 日 (火)
- \* 幼稚園創立 50 周年園児合同記念式典・・・1 月 31 日 (土)
- \* 幼稚園創立 50 周年記念式典・祝賀会 (123 名参加)・・・1 月 31 日 (土)
- \* 50 周年記念誌作成
- \* 50 周年記念オリジナルトートバック・鉛筆・ボールペン製作

#### (9) 建学の精神と伝統文化教育の探求

本園は、仏教精神による人間形成を基盤に思いやりのある温かい心を育む保育を実践。毎朝、親鸞さまに手を合わせ、いのちを大切にすること、感謝すること、人の親切にふれて感じる心を育んだ。

光華小学校との連携による伝承遊びを実施。また、小中高生の茶道部がお茶会を開催、預かり保育参加園児が参加した。

### 3. 付属施設の事業

---

#### ■ 真宗文化研究所

##### ・ 公開講座

春期に「学長法話の会」、秋期に「光華講座 (第 46 回)」を開催した。春期の講座は、一郷正道学長・真宗文化研究所長を講師として「私の理解する浄土について」を講題に法話の会を開催した。また、秋期の講座は、講師に東京農業大学農学部教授山部能宜氏を迎えて、「観仏経典としての『観無量寿経』—シルクロードとの関わりを考える—」を講題にご講演いただいた。

- **聖典読書会**

学生及び一般の方を対象として、仏典童話作家の渡邊愛子氏を講師に迎えて、経典にちりばめられている物語を輪読する「聖典読書会—仏典童話の世界—」を毎月2回開催した。この読書会では、分かりやすく味わい深くまとめられた仏典童話をそのもととなる経典の日本語訳を辿ることで、仏教の世界を紹介していただいた。

- **聖蹟巡拝**

浄土真宗ゆかりの地を中心として仏教関係の史蹟を探訪することを目的とした聖蹟巡拝を実施した。当年は、講師に大谷大学教授東館紹見氏を迎えて、法界寺、日野誕生院、平等院、萬福寺を訪ねた。

- **委嘱研究員・年報『真宗文化』第24号の刊行**

委嘱研究員制度に基づき、学外研究員として稲葉維摩氏、清水俊史氏、藤村潔氏を委嘱し、仏教、真宗文化に関する研究テーマに基づき、年間を通して研究していただき、その成果を真宗文化研究所年報『真宗文化』に論文として掲載した。また、本号には、第46回光華講座の講演録も掲載した。

- **研究会**

仏教と実学の関係について研究することを目的とした研究会を継続して開催した。本研究会では大学の学部・学科教育の根幹に息衝く仏教思想を確認しながら、本学の建学の精神を堅持し、そして発展させていくための研究を進めた。

## ■ **図書館**

大学図書館では、学生・教員の学習・研究環境向上を目的として、近年の学部・学科構成の変化を考慮しつつ、基礎教育から各学科の専門分野に対応した図書・雑誌の充実につとめた。近年は電子図書やデータベース類の需要が増す傾向にあり、十全な対応を心掛けた。

施設面では、ラーニングコモンズ整備の一環として、引き続き個別学習スペースを増設するとともに、1階にオープン学習スペースを設置した。

研究支援としては、昨年度運用を開始した京都光華女子大学学術リポジトリ<sup>※</sup>を充実させるべく、研究紀要や教職員が作成した報告書類の掲載を順次進めている。

また、キャリアセンター・Café 光庵など他部局との共同企画を継続実施したほか、社会人・高校生への開放、学園祭にあわせた館蔵古文書・古典籍展の開催、近隣の自治会文書や高等学校旧蔵図書の譲渡受け入れなど、地域に開かれた図書館を目指す活動にも取り組んだ。

<sup>※</sup> 学術リポジトリ … 学術論文等の教育研究成果をサーバに蓄積して、インターネット上で広く世界に公開・発信する電子書庫

## ■ 情報教育センター

株式会社ワークアカデミーへの委託で「ICT 演習Ⅰ・Ⅱ」を運営し、MOSの受験率・合格率の向上等大きな事業成果が得られた。今後さらに大きな成果が上がるよう改善を加える。また、情報演習系授業の学習促進に向け、eラーニング学習システムを導入し、学習環境を整備した。また社会貢献として、一般市民向けのICT講習会（テーマは「LINE入門」）を開催し、地域の方々に最新LINEの特徴等の理解を深めて頂いた。

## ■ カウンセリングセンター

平成26年度のカウンセリングセンターへの相談延べ回数は、739件（平成25年度は793件）、新規来談42件（平成25年度は38件）であった。地域貢献を目的として、春と秋に「無料相談会」を実施した。

カウンセリングセンターでの相談業務や臨床心理学の研究報告の場として、「京都光華女子大学大学院カウンセリングセンター研究紀要」第10号を10月に編集・発行した。

また、大学院生による手作りの広報誌「光華\*こころの手帳」第16号・第17号を作成し、近隣の小児科や行政機関に配布するとともに、年間を通してより「ひかりっこ\*くらぶ」\*1と「こもれびスペース」\*2を開催した。

※1 「ひかりっこ\*くらぶ」（親子教室）…臨床心理学を専門とするスタッフが、遊び（紙芝居、リズム遊びなど）を通して、親子のつながりを深める手伝いをする。

対象：就学前0～6歳の子どもと保護者 開催回数：3回/月、ファシリテーター（臨床心理士）2名  
いずれも当大学院修了生

※2 「こもれびスペース」（子育て相談）…子育てについて専門家に気軽に相談したり、他の保護者の体験談を聞いたりしながら、安心して子育てができるようにサポートする。

対象：就学前0～6歳の子どもと保護者 開催回数：1回/月  
ファシリテーター（臨床心理士）2名 いずれも当大学院修了生

## ■ 人権啓発センター

学生及び教職員を対象とした人権講演会（演題「絵本を通じて伝え考える人権」）を開催した。人と人のお互いが理解し合う事が人権理解の基本であり、それにはお互いがおもいやりの心を持つことが重要とされている。こころの形成は幼年時の教育でもって生まれ、幼年時教育に密接に関わる絵本を題材にして人権理解について考えた。講師からは実際に絵本を読んでもらうことで絵本の奥底にあるメッセージを学ぶ講演であった。特に保育士、幼児教諭を目指す学生が興味深く傾聴していた。教職員向けには人権研修として、実際にあった事例を取り上げて“キャンパスハラメント”について研修を行った。事例を聞く事で理解をより深められた研修となった。

## 4. 学園力強化に向けた事業

### (1) 学園広報活動

教育活動に関する情報については、各校園のホームページ及びスマートホンでその都度タイムリーに掲載し、学園の情報発信力の強化を図った。また、パブリシティ※1での学園情報発信にも努めた。さらに、学園VI（ビジュアル・アイデンティティ※2）定着を図るため、各校園名の告知として市バスラッピング広告（九条・梅津営業所運行内・2台）、阪急西京極駅の構内看板の掲出を行った。

※1 パブリシティ…学校法人が学校情報を積極的にマスコミに提供し、マスメディアを通して外部の関係者に学校の理解を深めていただく活動

※2 ビジュアル・アイデンティティ…学園のイメージをロゴやマークなどの形に表して、広く世間や外部に提供し訴求するマーケティング活動

### (2) 教員評価制度

大学・短期大学部においては、教育活動・研究活動・管理運営・諸貢献の4項目に関して評価を行った。教育活動と研究活動に重点を置き、学生支援や学生による授業評価（授業アンケート）の結果、および著書・論文の執筆や学会発表に関する配点を高くした評価点数（評価結果）は、学長・学部長・教員評価委員会に報告され、個別にフィードバックされることにより教員の資質維持向上に効果的に作用している。なお、次年度に向けては教員評価制度の更なる充実を目指し、教員の持つ特性に応じた職務遂行能力の向上に資する観点から、教員ごとに業務目標を設定し、その達成度を自己評価する仕組みを導入する方向で検討して、精度の高い教員評価制度にブラッシュアップする。

幼稚園・小学校・中学校・高等学校においても、特色ある学校づくりや信頼される学校づくりを目指し、学校教育の直接の担い手である教員一人ひとりの能力や実績を最大限に発揮させ、適正に評価するため、目標管理に基づく教員評価制度を導入している。面談を通して、目標の妥当性・具体性のチェック、実績の評価、課題の確認とその改善等を確認し個々の教育力の向上を図ることができた。目標管理を適正に実施・フォローし、教員一人ひとりがその実現に向けて邁進することにより、各校園の課題解決と個人の成長を促すことができた。今年度、優秀な結果を残した教員に、インセンティブとして報奨金を支給し、より一層モチベーションアップが図れた。

### (3) 職員力（SD）・組織力の向上

教職協働のためには職員力向上が不可欠であり、職員一人ひとりのスキルアップで、全体的な職員力向上を目指す必要がある。本学職員に求められる資質・能力とは、

テクニカル・スキル（業務知識・業務遂行力）、ヒューマン・スキル（対人能力）、コンセプト・スキル（企画・問題解決能力）の3スキルである。これらのスキルを習得すべく、初任者研修・中堅職員研修・管理職研修の区分けに基づき、個々の職員に必要なスキルを検討し、研修内容の見直し（SD体系図）を行った。具体的には、平成26年度に特に強化した点として、業務の計画性（タイムマネジメント）、研修に対する積極性に重点をおいたOJT中心の研修を行った。さらに、先進的な取り組みを行っている他大学への視察や関連研究会参加を奨励した。

また、昨年度から着手している事務組織改編をさらに展開し、グループ制を廃止して部として業務分担を行うことによって、事務局組織を大括りでよりコンパクトな組織にできた。指揮命令系統のスリム化を図り、弾力的な人材活用が可能になるよう再編を進めるとともに、重複・類似業務の整理及び人員配置の見直しも行き、マンパワーの有効活用を目指すことができた。研究室体制を廃止し、新たに学習ステーションやラーニングコモンズを整備し、学習時間を質・量ともに向上させる学習環境の整備とそれを支援する体制・制度を強化した。

地域における産官学連携や高大連携を拡充すべく、COC（Center Of Community）構想<sup>※</sup>の推進のため昨年度発足させた地域連携推進センターや環境教育推進室をさらに充実することができた。

<sup>※</sup> 平成24年6月に文部科学省から公表された大学改革実行プランの中で「地域再生の核となる大学づくりCOC（Center of Community）構想の推進」が示され、大学が地域の課題解決に取り組むことを求めている。

#### (4) コンプライアンスの強化 ～規律・規範の徹底 内部統制の強化～

新年度に向けて、学園教職員一斉登校日を設定し、経営方針の伝達を行うと同時に「光華女子学園教職員の職業倫理（行動規範）」及び光華女子学園就業規則の遵守の徹底に向けたメッセージを全教職員に発信した。新規採用者オリエンテーションにおいても同メッセージの周知を図り、規律・規範遵守の徹底に取り組んだ。その他、教職員必携や学園マイポータルサイトにおいても同内容を掲載し、いつでも目に触れ認識できるようにした。併せて、業務の適正かつ効率的な運営を促進するため、効果的な内部監査を実施した。

その他、リスク管理体制（地震、火災、ハラスメント等）の強化と情報公開の拡充及び外部評価（第三者評価）への準備に着手した。

## 5. 独自の取組み

---

### (1) 幼小中高一貫教育の創造

幼小中高では、建学の精神を基に、教育改革ひかりプロジェクトを立ち上げて2年目となった。小中高一貫教育の意義について、京都産業大学の西川信廣教授のご指導をうけて、基本認識の共通理解を行った。「言語部会」「宗教部会」「行事部会」を立ち上げ、小中高教員が協働できる組織を作った。特に「言語部会」が中心となって、各教科の授業の中で、思考力・判断力・表現力をつける言語活動の工夫ができるように、立命館大学井上雅弘教授の指導をうけ、授業研究を精力的に行った。夏季休業中の合同研修会ははじめ定期的に研修を行い、11月の研究発表会につなげた。11月21日には「言語活動の工夫で課題解決力をつける」というテーマで第2回光華教育研究発表会を開催することができた。小学校・中学校・高等学校それぞれ授業公開と高校生によるポスター発表を行い、「言語部会」「英語部会」「ICT部会」の3分科会を開催し、各地域から約200名の方々の参加を得て、有意義な研究大会が実施できた。特に「英語部会」への参加者は参加者の過半数をしめ、分科会でも本学園の取り組みについて大きな関心がよせられ、今後の取り組みに期待が寄せられた。

### (2) 建学の精神と伝統文化教育の探求

光華女子学園は、故 大谷智子裏方が、昭和14年に「仏教精神に基づく女子教育の場の実現」を発願され、東本願寺をはじめ有縁の方々から物心両面の援助を受けて、昭和15年に開学された。その建学の精神は、経典『仏説観無量寿経』の水想観にある一説「其光如華又似星月（そのひかりはなのごとしまたしょうがつににたり）」にちなみ、清澄にして光り輝くおらかな女性を育成するにふさわしい名称として名づけられた校名「光華」と校訓「真実心（しんじつしん）」一仏の心（真実＝自己を超えた広大清浄な心）一に込められている。私たちは、教育は単に知識、技能を習得させることにあるのではなく、人間形成、人格の完成を目指すものであり、学生が自ら真実の人間としての生き方を求める（自己を問い、自己を確立する）ようにするものでなくてはならないと考えている。

この建学の精神は、学園全体の教職員に共有化され、さらに研修会、宗教行事、入学・卒業式等を通して十分に浸透させている。

また、国際的な視野を持ち、感性を磨くには、まず日本の文化を知ることが大切と考え、各界を代表し、活躍されている皆様のご指導や監修をいただき、日本の伝統文化教育を正課や特別講義で開講している。長い歴史の中で培われてきたそれぞれの伝統文化に触れながら、心が潤うゆとりの時間を共有し、個性豊かで国際的な視野を持った女性を育てることを目指している。



### (3) 奨学金制度

学生の学ぶ意欲を経済面からサポートするために、入学時における「資格特待生制度」、人物・成績ともに優秀な学生に対する「在学成績優秀者奨学金」、予期せぬ出来事により経済面で修学が困難となった学生への支援「緊急支援奨学金」、留学生の学びを応援する「外国人留学成績優秀者奨学金」など、多様な経済的支援を充実させている。

また、中学校・高等学校においても学業・スポーツ・経済的支援などの各種奨学金制度を充実させている。

平成 26 年度においては充実した奨学金制度により、全学の奨学金支出は 3 億円強に達した。これは納付金収入の 10%に相当する額である。

### (4) 陸上競技部の活動

陸上競技部後援会、陸上競技部 OG 会、教職員等の各方面からの支援のもと、以下の成績を収めた。

#### ◆ 大学・短期大学部

関西学生対校女子駅伝競走大会において 9 位となったが、2 年連続 4 回目の全日本大学女子駅伝対校選手権大会出場を果たすことはできなかった。個人では全日本インカレに 3000mSC で佐々木美紅選手、5000m で中村光選手が出場を果たして健闘した。

#### ◆ 高等学校

京都府高等学校駅伝競走大会において 6 位、近畿高等学校駅伝競走大会では 11 位となった。

#### ◆ 中学校

個人種目において、多田愛海選手が 100m で 2 年連続ジュニアオリンピックに出場を果たした。

### Ⅲ. 施設・設備等整備事業

平成 26 年度は、以下の施設・設備等を整備することができた。

<p>光風館内装改修工事</p>	<p>館内供用部分の床張替、壁・天井塗装、ロビー椅子更新</p> 
<p>光風館講堂天井耐震化改修工事</p>	<p>講堂内の天井下地の耐震化及び天井張替</p> 
<p>光風館バリアフリー化改修工事 (エレベーター及び壇上リフト設置他)</p>	<p>館内外のバリアフリー化 エレベーター（1機）、館外リフト（1台）、 館内リフト（2台）、館内外スロープ（2箇所）、 多目的トイレの設置工事（1か所）</p> 
<p>光風館 講堂控室内装改修工事</p>	<p>床張替、天井・壁塗装、パーテーション設置</p> 
<p>光風館講堂 WC 改修工事</p>	<p>男女トイレブース分け工事及び和式から洋式便器に更新</p> 



3号館耐震補強改修工事に伴う事前耐震診断	耐震補強工事に向けた耐震診断
4号館1階内装改修工事	床張替、内装塗装、電気照明器具更新、 空調設備更新、机・椅子更新、AV設備更新 
4号館地下1階ピアノレッスン室等改修工事	学部設置に伴う施設の整備 建築工事（ピアノ個人レッスン室（18室）、グランド ピアノ室（1室）、部室（5室））、電気・防犯設備・機 械設備工事 
慈光館2階教室改修工事 （こども教育学部模擬教室整備）	パーテーションを含む内装更新、照明器具更新、 AV設備、机・椅子更新 
こども教育学部こども教育学科ピアノ購入	学部設置に伴う備品の整備 グランドピアノ（1台）、アップライトピアノ （18台）、電子ピアノ（6台） 
こども教育学部こども教育学科備品購入	学部設置に伴う備品の整備 教科毎の備品（一式）
こども教育学部こども教育学科図書費用	学部設置に伴う図書の整備（1,579点） （内訳）和書:1,464点、和雑誌:43点、絵本:72点

賢風館外装改修工事	<p>外壁塗装、クラック補修、屋上防水、外壁シール更新</p> 
大学健康科学部医療福祉学科 言語聴覚専攻備品予備費	慈光館 3・6 階実習室への備品等整備
小学校電子黒板導入工事	<p>小学校一般教室全室（12室）に電子黒板整備及びホワイトボードに更新</p> 
特殊建築物及び設備定期報告指摘事項改修	指摘事項に対する改修
清風館大型プリンター更新	学園事務局入試広報部内に設置